

情報記号論の諸問題

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

石田英敬

研究室：駒場キャンパス9号館323

MAIL : nulptyx@boz.c.u-tokyo.ac.jp

URL : <http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~nulptyx>

<http://www.nulptyx.com/>

コミュニケーションシートについて

第一回目のコミュニケーションシートを来週の火曜日までにお願いします。

自己紹介・質問表を兼ねたものです

第4回講義
「記号の概念をめぐって」
(その3)

目次

- I. **Problematic** Ecce Signum 或いは〈記号〉の問題論的起源(前々回)
- II. **Archeology** 〈人工記号〉の記号論(前々回)
- III. **Epistemology** 現代記号論の〈記号〉仮説(前回)
- IV. **Interface** 〈記号〉と〈情報〉(今回)

Interface

IV <記号>と<情報>

先週までの論点

記号論の認識論的な位置：

人間の意味経験が〈文字〉として書き取られる〈精神〉や〈意識〉の活動ではなくなる

→意味はテクノロジーが記録する〈記号〉の活動となる

脳と言語

- La langue est une somme d'empreintes disposées dans chaque cerveau.

ラング(言語体系)とは各人の脳のなかに配置されている徴の総体のこと
(Saussure)

→ 共時態言語学の首位性

I ソシユール記号学の基本概念と 〈記号と情報〉問題

問い 1

ソーシャル記号学は
「言語記号」中心の記号学か？

先週の図式：

音声 - 音 = 記号

→ マルチメディア時代の記号学

多様な -graph, -phoneの時代

([photograph](#), [telegraph](#), [phonograph](#),
[cinematograph](#), [telephone](#), [radiophone](#))

問い2

ソシュール派記号学のアポリアは
奈辺にありしや？

ソシュールの記号学プロジェクトを構造主義言語学の「言語記号」モデルで理解することの問題点

→ソシュール記号学プロジェクトをソシュール派記号学から「解放」する必要性

1 Sa / Sé をめぐって

記号 = 記号表現 + 記号内容

Signe = Signifiant + Signifié

記号の内在主義 (= 記号主義) と脳の神経ネットワーク

→ 資料1参照

Saussure の 記号図式

記号内容と記号表現

概念と聴覚映像

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
『記号内容と記号表現』
を省略させていただきます。

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
『概念と聴覚映像』
を省略させていただきます。

Jean-Pierre
Changeux
*L'Homme de
vérité*
éd. Odile
Jacob
より

→ 資料2参照

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
“Jean-Pierre Changeux
L'Homme de vérité
éd. Odile Jacob”
を省略させていただきます。

言語中枢と

Sa / Sé の結びつき

上 *Schéma de*

Lichtheim (1885)

下 *Déjeune* による

言語中枢図(1901)

Changeux 前掲書

p. 183

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
“Schéma de Lichtheim
(1885)”とDéjeuneによる
『言語中枢図』(1901)
を省略させていただきます。

記号内在論

音韻形式（音韻論）とカテゴリ（意味論）との
対応関係にもとづいた心的二項主義

→ソシュールの「ラングの言語学」

2 記号の恣意性とシステム

言語記号の恣意性

l'arbitraire du signe linguistique

1. Sa / Sé の間の結びつきの恣意性
2. Sa / Sé を分節化しているシステムの恣意性

→ 資料1参照

分節 (articulation)

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
『ソシユールによる言語記号の波の図』
を省略させていただきます。

記号のシステム

言語記号の恣意性の根拠はその形式性・システム性にある

記号は実体ではなく形式である。

「ラングには実体はない」

→ ラングは形式からなるシステム

3 かたちの単位としての分節

音韻論が研究するのは分節単位としての音素

- 分節 (articles, articulation) が言語記号という形式の要素単位をつくっている
- 分節の単位は相互の「差異」の関係にもとづいて「システム」を構成してる

→資料1参照

音声と音韻

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
『音声器官の主部』
を省略させていただきます。

音素と「差異のシステム」

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
『母音符号』を省略させていただきます。

「差異のシステム」と「分節」

「分節 (articles)」とは、差異によって区切られた単位、関節や竹の節のようにそれぞれの節が相互に区別しあう非連続の単位をいいます。

- 「ラテン語では、articulus[分節]は (・・・) 事物の継起的連続における要素、部分、下位区分’をいいます。言語活動においては、分節は、音連鎖の音節への下位区分を意味するか、意味作用連鎖の意味単位への下位分割を意味します。」(ソシュール)

→資料1

音素と語(＝形態素)

音素のレベルではコトバは意味を持ちませんが、音素を分節として連結する(＝分節化 articulate)ことで意味をもつ形態素が生まれます。

弁別特徴 < 音素 < 形態素 < 句 < 文

恣意性・分節・システム

(言語)記号は、それ自身の形式の分節化のシステムによってのみ定義されるのであって、その分節化のシステムは恣意的である(一つのシステムが音物質をどのように形式的システムとして分節化しているかは、そのシステムにのみ理由がある)。

4 「差異のシステム」と 記号の「価値」

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
『差異のシステム』と記号の『価値』
を省略させていただきます。

→資料1参照

弁別性(差異性)

分節にもとづく差異のシステムをつきつめていくと、形式的要素は二項図式によって書くことができるようになる

音素から弁別特徴 (distinctive features) へ

cf. ヤコブソンの二項主義

(フォルマリズムと二項形式)

Parenthèses

かたちの思考

ソーシャルに現れた〈かたちの思考〉は、他の領域の記号、例えば絵画記号をめぐるパウル・クレーの「造形思考」と平行して理解することもできる。

かたちと意味

記号とかたちの生成をめぐる同じ問題は、画家のパウル・クレーが『造形思考』で試みたことでもあります。クレーが扱ったのは、魚のかたちをめぐる、記号によるかたちの〈分節〉の問題ですが、そこでもやはり画面を鱗のようなモザイク構造に分割することによって、かたちを分節する最小限の単位を求め、それらの形式的要素を組み合わせて〈分節化〉することによって、魚の形を生成することができることを示そうとしました。

クレー 「造形思考」

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
クレー『うろこのある魚』
を省略させていただきます。

分節にもとづくシステム

著作権処理の都合で、この場所に挿入されていた『パウル・クレーによるマス目の分析のデッサン』を省略させていただきます。

分節による差異のシステム

[分節のシステム]

「音素phoneme」にも「画素pixel」にも共通した形式化のシステムとして、ソシュールやクレーの「記号論」の基礎をなしている

Saussure 「二重分節」と「形態素」

Klee 「分節」と「かたちの生成」

→ かたちの微分と積分 (Leibniz)

意味を微分する

- ソシュールの「記号」理論の基本にあるのは「意味」を「微分」して「形式化」するという構想であろう。
- 「音物質」から「かたち form」のみを抽出し、その「かたち」を微分することによって分節単位をベースとした「記号」の「差異のシステム」を取り出すこと、これが「記号学」のオペレーションである。
- 「記号」という「形式」は、「心的」なレベルにおいて成立する「かたちのシステム」であって、「物質」や「生理」からは独立している。

(したがって、マルチメディアで成立可能)

5 paradime / syntagme

記号の現働化の二つの軸
と

記号実現の「線条性」のテーゼ
(←シニフィアンの線条性)

(→ 資料1参照)

Paradigme (範列)

「範列(パラディグム)」とは、ひとつの言述(パロール)が実現するときに、記号の現働化を規定している記号間の「連合関係」のこと。

「範列」は「不在状態でin absentia」に記号の実現に関与している。

サンタグム(連辞)

「連辞(サンタグム)」とは、ひとつの記号の実現の次につづく記号の実現の系列を指定している「結合関係」のこと。

連辞は記号実現に「現前状態 in praesentia」で関与する。

6 ラングとパロール

ソシュールは、記号活動の実現の出来事を「言述 パロール la parole」として、記号のシステムとしての「言語体系 ラング la langue」と区別し、言述（パロール）の実現の規則として、「範列（パラダイグム）le paradigme」と「連辞（サンタグム）le syntagme」という二つの軸を提示した。

→ 資料1

意味実現のメカニズム

- 記号は離散的 (discrete) な特徴から成り立ち、線条的 (linear) に実現する。

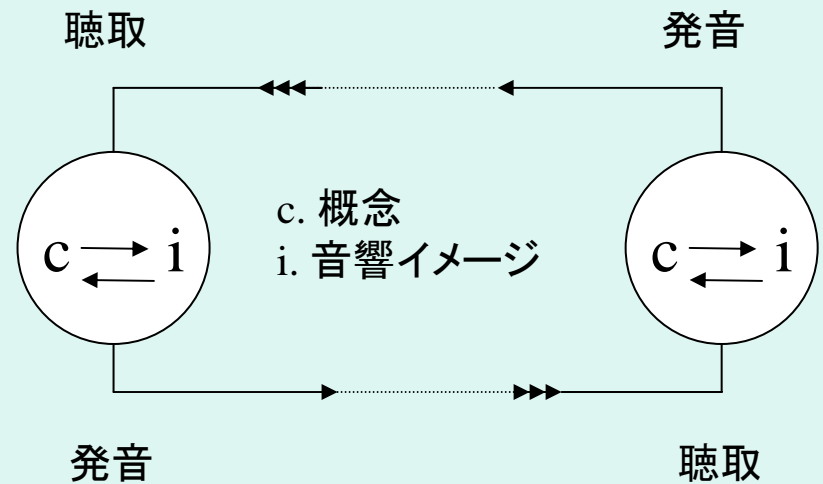
音素から形態素へ : 離散性

統語論へ : 線条性

コミュニケーション図式

ソーシャル 「ことばの回路」

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
“PLACE DE LA LANGUE
DANS LES FAITS DE LANGAGE”
を省略させていただきます。



「記号」のエピステーメー

- 恣意性
 - 形式/分節
 - システム
 - 差異/弁別
 - 離散性
 - 範列/連辞
 - 線条性
 - 潜勢態と現働化
- などの諸点を通して特徴づけられる

Interface 1 記号と情報

- 記号の差異のシステムは二進法で記述可能？(cf. Leibniz)
- 記号実現の線条性を支えている連辞性の規則は数理化かのうであり究極的にはアルゴリズム化しうるのか？(cf. Chomsky)

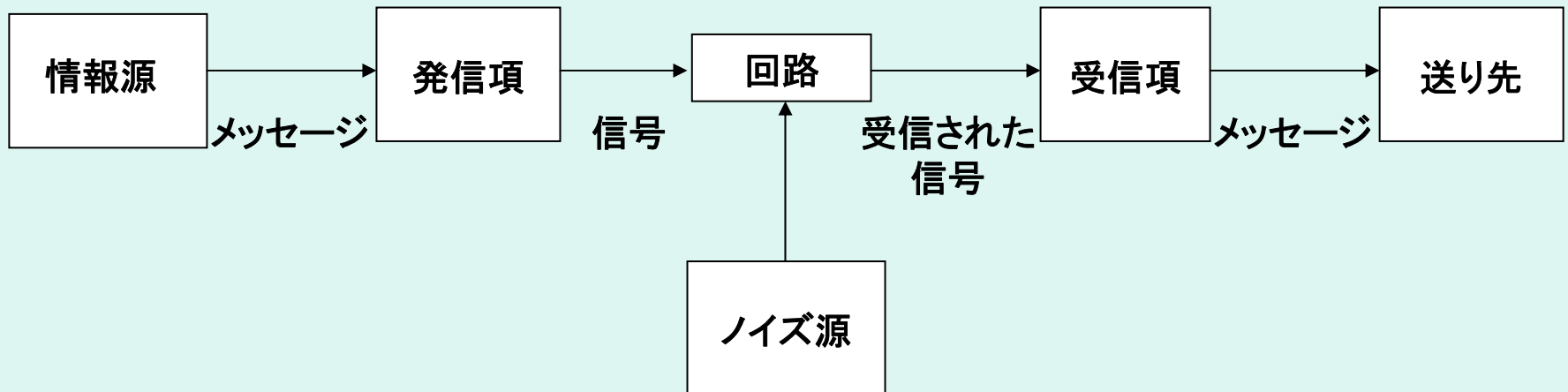
→ 言語機械とチューリング機械

Interface 2 記号と情報

「ことばの回路」に示されたコミュニケーション図式は、「情報の回路」とどのような関係にあるのか？

→ 記号論と情報理論とのインタフェースとはなにか？

Shannon-Weaver Model



→ 資料3参照

「シャノン・モデル」と「ことばの回路」

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
『シャノン・モデル』と『ことばの回路』
を省略させていただきます。

ヤコブソンの「六機能図式」

